わたしの小学校時代

甘木市　　早野　善人

私は昭和９年１２月１３日、福岡県朝倉郡立石村一木（現在甘木市大字一木）に、男７人女３人兄弟の三男として生まれた。私が小学校３年の時に、両親を亡くした従兄弟３人が本家である私の家にひきとられてきた。そのため私の家は子供１３人の大所帯であった。

私は昭和１６年４月、立石国民小学校に入学した。そしてその年の１２月８日、太平洋戦争が始まる。当時は毎日毎日が食糧増産であり、畑はすべてトイモ畑であった。学校に行ってもトイモ作りに行く日が多かった。炎天下で畑の草取りをしなければならず、つらい作業であった。また、当時洋服は桑の木の皮を原料としていた。そのため、皮むきにもよくでかけた。多くの皮を持って行った者は表彰され、賞品として服がもらえる。競って私達は皮むきをした。学校では毎日防火訓練が行われ、サイレンが鳴ると帰る準備をして地区別に運動場に並ぶ。そして走って帰るか、または、運動場のはしにあった椎の木の森の防空壕に入った。

昭和２０年３月２７日は修了式で、当時私は小学４年生であった。正月に買ってもらったばかりのまだ数回しか履いていない新しい下駄を履き、１年生の弟の手を引いて学校に行った。姉たち２人はすでに卒業式を終えていたし、また、兄は高等部のため当日は休みであり、その日学校に行ったのは私と弟と２人だけであった。

講堂で校長先生の話があっている時、警戒警報のサイレンが鳴った。校長先生は、式はもうすぐ終わるからと話を続けられた。しかしまもなく、今度は空襲警報のサイレン。校長先生はすぐ話を打ち切られた。そして先生の指示で私たちはすぐに運動場に整列した。全員が並ぶと地区ごとに走って帰途についた。

私たち高学年は１年生の手を引き一木方面へと走りだした。一木地区は６０名余りの一番多い児童数であった。私達がドンドン橋（現在の大添橋）まできた時、数機の銀色に輝くＢ２９が編隊を組み、頭上を大刀洗飛行場に向かって飛んでいくのが見えた。そして、まもなく飛行場爆撃を開始した。私達の目にも、そのＢ２９の姿が、地上から４５度の角度ではっきりと見えた。Ｂ２９は黒い物をパラパラと落し始めた。すると、「ヒュー」という音がし、「ドドン、ドドン」と地響きがした。続いて黒い煙がもくもくと上がった。そしてまた、次々と編隊を組んだＢ２９が私達の頭上を通りすぎていった。

私達が生徒隊横まできた時（現在Ａコープがある地点）、「溝の中へ伏せなさい」と先生の声がした。先頭の人はもう数百ｍ前方を走っていたが、もどり、溝の中へ入り始めると、土手の内側で鉄棒を持って伏せていた兵隊に「ここは生徒隊があるし爆弾を受けるかもしれないので、引き返せ」と言われた。そのため私達は一面桑畑の農道を通り、学校の方面へ戻り始めた。

その途中、前方に竹やぶと大きな椎の木の森が見えた。私達は先生の号令でその森の中へ走

り込んだ。そして常日頃練習していたとおり、大きな木のまわりに班別に円を作って、目と耳を手でふさいでうつぶせになった。まもなく、地震のように地面が揺れ、大きな音がした。気がつくと私の頭の上にはどっさりと土がのっており、「横の溝に入れ」と先生の声がし、私は３ｍほど離れたところの深さ１ｍ余りの溝に入った。こんな所に溝があったとはその時気が付いた。頭に手を当てると、血と泥がべっとりとくっついていた。しかし、痛みはなかった。

しばらくして、人のざわめきではい上がると、あの生い繁っていた森が、ポツリ、ポツリと折れた木が立っているだけになっている。私が呆然と立っていると、「小学校へ行け」と誰かの声がした。私は弟の手をひいて裸足で小学校へ向かった。

小学校へ向かう道は到る所に爆弾の穴があいていた。それを乗り越え小学校へ着いたが、運動場一面爆弾の破片でおおわれていた。私は頭を少しケガしていたため、小学校の運動場の角に作られたテント張りの応急処置場で処置をしてもらい、病院に行くため迎えに来た木炭バスに乗った。そのバスは後の座席にはたくさんの木炭が積んであり、その上に座って太刀洗病院（現在の県立朝倉病院）に行ったが、病院内は、次から次へとトラックで運び込まれてくる大刀洗飛行場の兵隊さん達でごった返していた。

病院で手当をしてもらい、家に戻ると、「一木の子供は全部死んだ」という噂を聞いて息を切らせて帰ってきた母がいた。母達は三奈木の山に薪を取りに行き、山の上でこの頓田の森の爆撃を見たという。私の弟はかすり傷で済んだが、亡くなった者は３１名であった。迎えの人がお菓子箱にモミ殻を詰めた卵を持って、早く良くなるように見舞いに来てくれた時の嬉しかったこと。

この年の８月１４日、いつものように駄菓子屋の前に集まり遊んでいた。この店には、一木に１台しかないラジオがあった。そして明日１２時より天皇陛下の重大なお言葉が放送されると聞いた。しかし、１５日の昼頃は近くの川での水遊びに忙しく、ラジオを聞き逃した。まもなく「日本は戦争に負けた」「戦争は終わった」という大人の立ち話を聞いた。いろんな噂も流れ始めた。「若い女子は髪の毛を切って男の姿になっていなければアメリカ兵に連れて行かれる」「働いていても先はどうなるかわからない」などというものであった。

戦争とはいえ一緒に学校に通ったり、遊んだりした仲間が３１名も亡くなった。子供心にアメリカ兵を恨んだこともあった。戦争の悲劇は、５０年過ぎた現在でも３月２７日がくるたびに当時のことを思い出す。